

2023 年度
情報経営イノベーション専門職大学
入学者選抜試験 一般入試 C 日程

国 語

注 意 事 項

1. 試験時間は 60 分。
2. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせること。
4. 解答用紙には解答欄以外に受験番号等の記入欄があるので、監督者の指示に従ってそれぞれ正しく記入すること。
5. 解答は、問題に対応した解答用紙の解答欄にマークすること。
6. 問題冊子は持ち帰らないこと。
7. 試験終了まで退出しないこと。

—
次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

「構造主義」で著名なフランスの民族学者クロード・レヴィ・ストロース（一九〇八―二〇〇九）は、外国を訪れた際、時間がない時でも市場だけは見ると薦めている。市場はそこで「価値があるとされるもの」が交換される場であり、その土地の文化を知る上で不可欠の参照点だからだろう。「交換 exchange」を社会の根源として見出した彼^いならではの卓見である。

じつさい、ヒトが生活に必要なモノやサービス（「財貨」）を自分の力だけで産み出すことはほぼ不可能で、何らかの交換が必須となる。しかも、生産物や生産期や生産性の差異を利用して利益を生み出すことも可能で、交換は、利潤をあげる「交易 trade」にも、仕事としての「商業 commerce」にもなりえるのだ。

古今東西の交換慣行に目を向けると、相手と言葉を交わさない「無言交易 silent brother」、命がけの遠洋航海で腕輪と首飾りを交換する西太平洋トロブリアンド諸島の「クラ kula」、より多くを贈与することを競い合う北太平洋岸ネイティヴ・アメリカンの「ポトラッチ potlatch」など、風変わりな事例に事欠かない。こうした事例を博搜して交換の原理を探究したのがフランスの民族学者マルセル・モースの『贈与論』（一九二五）である。古今東西の交換を貫く原理とは、財貨の移動と「負い目 debt」の相関であるとモースはいう。

それらの社会のすべてにおいて、人と人とを結びつける物の交換と贈与は、共通の観念基盤にもとづいておこなわれている。[…]^① 贈り物を受け取るということ、さらには何であれ物を受け取るということは、呪術的にも宗教的にも、倫理的にも法的にも、物を贈る側と贈られる側とにある縛りを課し、両者を結びつけるものである、というのがそれだ。物は一方の側に由来しており、その人が自分でつくったり手に入れたりしたもので、その人の物である。物がそういうものであることによって、その人はそれを受け取る人に対してある力能を得ることになる。給付を与えたのに、それへのお返しがあらかじめ規定された方式（法的方式であれ経済的方式であれ、あるいは儀礼的方式であれ）によってなされないならば、給付の与え手はもう一方に対して優位に立つことになるのだ。（『贈与論 他二篇』森山工訳、岩波文庫、

二〇一四、四三頁^{べし}）

まとめると、贈り物は受け取らねばならず、受け取ったからには相手に「負い目」を感じなければならず、その「負い目」は返礼つまり新たな贈与によってしか解消されない、ということになる。よほど面の皮を鍛えたり心臓の毛を増毛したりするのでもない限り、この原理に従わざるをえない。そこで、贈ってくれた相手に同じように贈与することになり、相手は再びそれを受け取り、「負い目」を感じ、返礼することになる。こうして贈与は際限なき応酬となり、「負い目」は無限に継続する、そのことが、人と人が取り結ぶ社会的紐帯^{ちゆうたい}の根源となる、というわけだ。

これは、さらに三種のパターンを派生させる。小田亮^{おだまこと}『構造人類学のフィールド』（世界思想社、一九九四）に従って概説すると、人類社会^②

には贈与、分配、再分配、市場という四つの原理的な交換パターンが見出されるという。

「贈与 gift」は、「負い目」を持続させるもので、農耕を生業とする部族制社会で主要な交換原理として用いられる。

「分配 sharing」は、誰かが手に入れた財貨をみんなで配分するというもので、最初に入手した者が誰であれ、全員に財貨がゆきわたるので、特定の誰かに負い目を感じる必要がなくなる。負い目の「曖昧化」だ。分配は、狩猟採集社会で主要な交換原理として用いられる。獲物との遭遇が偶然性に委ねられる狩猟において、そうすることで財貨の獲得が最も安定するからだろう。日本でも、猟や漁に参加した全員に獲物が分配されるという習俗は各地で見られる。文化人類学者にして作家である上橋菜穂子^{うへはしなほこ}は、もともと狩猟採集民だったオーストラリアのアボリジニの子どもは、学校のテストで友達に答えを教えてしまうことが多い、と報告している。自分が手に入れた知識を自分だけで独占することを良しとしないのだ（『物語ること、生きること』講談社青い鳥文庫、二〇一六）。狩猟採集のなかで培われた「分配志向」がうかがわれる。

「再分配 redistribution」は分配と似て異なるもので、財貨を一旦誰かに集約し、そこから再び財貨が配分されるというもの。ここで重要なのは、使える財貨は常に分配された財貨であり、その結果、それを与える者すなわち財貨を集約した者に「無限」に負い目を感じるようになるということだ。配分された財貨が集約されたそれより常に少ないにもかかわらず。このパターンが主要なものとなるのは王権社会で、無限の負い目は、王に対してこそふさわしいともいえよう。

最後に、こうした負い目を「払拭」することで、煩瑣^{はんさ}な関係性を打ち切って円滑な交換を実現するというパターンがあり、これを「市場 market」という。「貨幣」が媒介することで市場交換はさらに加速される。これを主要パターンとするのが近代資本主義社会であることは言うまでもないだろう。

注意すべきは、この四種の原理的パターンは、じつさいにはそれぞれの社会に併存しているもので、たとえば、市場経済が基本となる現代社会においても、国家の税制に基づく再分配もあれば、贈与や分配が行われることもある。いわゆる「おすそ分け」が分配なのか贈与なのか分かりづらいように、どのパターンなのか判然としない場合もあるだろう。

ともあれ、財貨の移動は反対方向の負い目を発生させるものであり、この原理を変換することで現実の様々な交換は成り立っている。それは同時に人と人との関係性を規定するものであり、レヴィ・ストロース^③のいうように、社会の根源は交換なのだ。

④ 日本における商業の発生と展開を概観しよう。

まず、「臨時から常時へ」という流れがある。あらためて考えると、交換とは、自分が必要としないものを必要とし、自分が必要とするものを必要としない相手、すなわち、自分とは正反對の「他者」との交渉である。そのような他者との交渉を支える存在として、神仏の加護が求め

られたのは当然の成り行きであり、古来、市の多くは祭りとともに臨時に設けられた。記紀に登場する海柘榴市（奈良県桜井市）が、歌垣がこなわれる男女の出会いの場となったのも、それが祭りの場であればこそだ。京都・東寺の「弘法さん」や北野天満宮の「天神さん」といった寺社の縁日に開催される縁日市が各地にみられるのも、その名残りと考えて良い。こうした市を加護する神仏が信仰され、さらには、恵比寿など、商業の守護神としての「市神」が信仰されることになる。

このような臨時の市は、やがて三斎市（月三回）となり、六斎市（月六回）となり、ついには常時の市となった。その一方、定期市もいまなお各地で開催されている。絵本『にちよういち』（西村繁男、童心社、一九七九）でも有名な高知市の日曜市の起源は、元禄三年（一六九〇）にまで遡るといふ（「日曜市」の呼称は近代以降だろうが）。土佐の新鮮な野菜、果物、花卉、魚といった一次産品から、カマボコ、天ぷらなどの加工品、農機具、古道具まで、さまざまな露店がおよそ全長一キロにわたって並び、多くの客でごった返す。観光客にも大好評で、高知市のホームページには「日曜市は毎週日曜日にのみ開催しています。年間を通して日曜日以外に開催することはございません」という不思議な注意が記されている。

また、「移設から常設へ」という流れも認められる。市が臨時であれば、どこから運びこむことになるのは当然だろう。「はこぶ」と「とりかえる」は深く結びついている。移動しながらの商い、すなわち行商は古くから行われ、イタダキ、ボテフリといった行商人の呼称は、それぞれ頭上、担い棒といった運搬方法にもとづく名称である。商品の到着をアナウンスすべく、独特の呼び声や囃子も工夫された（その末裔がさおだけ屋か）。薪炭を届ける大原女、川魚を届ける桂女など、近郊農漁村からの物資供給が京の都を支えていたわけで、市中の寺院に仏花を届ける白川女は、二一世紀初頭でも大八車を曳く姿を見ることができた（さすがに今は軽トラを使うようだが）。富山の薬売りが、使った分だけ補充して代金を取る「置き薬」という仕組みで販売網を全国的に広げたことは、よく知られているところだろう。

かつてはサービスも移動販売が主流で「出職」と呼ばれた。現場で作業する石工、大工、屋根葺きなどの職人は当然そうなるし、木器を作る木地師、鑄鉄を作る鑄物師、鉄器を加工修理する鍛冶師なども、その材料を求めて全国を巡り歩くことになる。滋賀県東近江市の君ヶ畑、蛭谷が発祥の地とされる木地師は、文徳天皇の第一皇子である惟喬親王から木地師の技を授けられたとする伝承をもち、皇室から与えられたとする諸国通行と木材伐採の許可状（偽文書だが）を携えて各地で木工に従事した。こうした漂泊する人々が、ときに特別視され、差別されつつ、地域間の交流に与り列島社会を形作っていったことは、「はこぶ」の節でも指摘した通りだ。

そして、「兼業から専業へ」という流れが認められる。臨時で移設の商いでは、漁師が魚を売り、農家が野菜を売るなど、生産者が販売者を兼ねることはごく普通だった。しかし、流通が拡大していくと、商いのプロ、商家が誕生することとなる。「店」という言葉は「見せ棚」すなわち商品を並べて見せる棚に由来するとされ、専業の商家が常設される店を営むという形がスタンダードとなっていくのだ。見せて／魅せて売

ることに最適化したディスプレイが創意工夫されることとなる。港町、宿場町、門前町、城下町など、人々の集う町に商家の集まり＝商店街が生まれ、町ならではの賑わいを生み出していった。

さらに商家の発生は、同業者集団にも展開する。中世には酒屋や土倉の座、すなわち同業者集団が形成されていたことが知られており、品質維持につとめるとともに、商慣行を定め価格を統制することで同業者の利益保持に努めた。こうして出来上がった商慣行は、外部からはうかがい知れないものともなっている。時代は下るが、一九三五年に開設され二〇一八年に営業終了した東京都中央区の築地市場は、全国各地の魚介類が集まることで知られ、なかでも早朝のマグロ卸売りは異様な活気に包まれたものだった。運びこまれたマグロが並べられ、仲買人たちが品質を素早く入念にチェックした後、壇上に上がった売人が競売りしていく。歌うような踊るような声と身振りで、わずか数十秒の間に仲買人と商談が成立するが、何がどう売れたのかは素人には全く理解不能である。

こうした商慣行は、時代や状況の必要に応じて生み出されたものであり、相応の役割を持つものではあるが、なかには複雑化・細分化が甚だしく、機能不全をきたしているように見受けられるものもある。そしてその克服の努力が、商業近代化の道のりとなる（中村勝『市場の語る日本の近代』そして文庫、一九八九）。

（菊地暁『民俗学入門』より）

※設問の都合上、原典を一部改変した。

問一 傍線①「共通の観念基盤にもとづいておこなわれている」について、その説明として不適切なものを選び、記号で示せ。

- ア 交換と贈与は、贈る側と贈られる側の両者を結びつけるものである。
- イ お返しがない場合は、贈り手は受け取った人に対して優位に立てる。
- ウ 価値があるものしか交換、贈与をしてはいけない。
- エ 負い目を感じた場合は、新たに贈ることによってしか解消できない。

問二 傍線②「人類社会には贈与、分配、再分配、市場という四つの原理的な交換パターンが見出されるという」ことについての説明として、不適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 贈与は負い目を持続させるもので、主に部族制社会の交換原理であるということ。
- イ 分配は得たものをみんなで分けるため、負い目を感じる必要がなくなること。
- ウ 再分配は無限に負い目を感じるようになるため、資本主義社会では見られないということ。
- エ 市場は、円滑な交換を実現するもので、貨幣がその速度を加速させるということ。

問三 傍線③「社会の根源は交換なのだ」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 一般的に価値あるとされるものが交換されるため、その社会や文化をよく表しているから。
- イ 交換をしなくては、社会生活を送るうえで必要なモノやサービスを得ることが不可能だから。
- ウ 交換の原理に関わっている返礼は、人間社会を円滑にする倫理として重要な要素だから。
- エ 交換は人と人とを結びつけ、交換パターンによって人と人との関係性が決まるから。

問四 傍線④「日本における商業の発生と展開」について、不適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 自分とは正反対の他者との交渉を支える存在として、神仏の加護が求められた。
- イ 市が常設になったため、品物を運ぶことが必要になり、行商という形態が初めて生まれた。
- ウ 生産者が販売者を兼ねることが多かったが、流通が拡大すると、販売専業とする者が現れた。
- エ 専業は、専門家集団の形成につながり、品質維持や価格の統制など、同業者の利益保持を行った。

問五 本文の内容に合致するものを記号で示せ。

- ア 四つの原理的な交換パターンはそれぞれの社会に特有のもので、同一社会に複数見られることはほとんどない。
- イ 市は祭りとともに臨時に設けられることが多く、常時開催されるようになって、臨時の市は各地に残っている。
- ウ 木工職人はかつて移動販売が主流で、皇室からの許可状をもって木材の伐採を行っていたため、尊敬を集めていた。
- エ 古来、生産者は販売も行っていたが、このことが現在の、生産者が製造・販売を行う第六次産業につながっている。

二 次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

言い淀む時間を恐れず、話し手と聞き手がともに言葉を探し、言葉を待つことができる場合は、私たちににとって必要だが、しかし、なかなか実現されない貴重な場だ。それゆえ哲学対話や哲学カフェでは、そのような場を意識してつくり出すために、相手の発言を途中で遮る行為や、発言の内容を評価したり否定したりする行為を制限するルールを設定する場合が多い。

ただし、あらゆる対話にそのようなルールを設定すべき、というわけではない。たとえば、相手の話が重要なポイントに差し掛かったり、逆に話が本筋から脱線しつつあるときなどに、そこでいったん話を止めて整理することが有効な場合もあるし、内容に対する的確な批判が対話をより豊かなものにする場合もある。

四年前の二〇一七年六月二三日、参議院議員の今井絵理子^{いまい えりこ}さんがSNSに、「批判なき選挙、批判なき政治」というスローガンを掲げた投稿を行い、物議を醸す事態となったのはまだ記憶に新しい。

文字通りの意味での「批判なき政治」とは、市民が政府に異を唱えることを許さない全体主義国家の専制政治のようなものだが、おそらく今井さんはそうした意味でこの言葉を用いたのではないだろう。多くの人がすでに指摘しているように、この場合の「批判」は、相手への攻撃や激しい非難^{いひなん}といったものを意味していたのだろう。

もしそうであれば、「批判」に対するそのような受けとめ方は、今井さんだけではなく、比較的多くの人々にいま共通していると言えそうだ。たとえば、誰かの行為や考え方などを明らかに批判しているときにも、「正しくない」とか「間違っている」、「よくない」などと言うことが避けられ、「違和感がある」とか「モヤモヤする」、「モヤる」といった言葉が用いられているケースをよく目にする。つまり、「私は誰かや何かを批判しているのではなく、単に違和感やモヤモヤを表明しているだけなのだ」というポーズをとることによって、攻撃ないし非難の色合いをぼやかそうとするケースだ。

「批判」にあたる欧語、たとえばドイツ語の *Kritik* や英語の *criticism* は、古代ギリシア語の「クリネイン（ふるいにかける、分ける、裁判する）」や、ラテン語の *cernere, cret-*（区別する、選り分ける）に由来し、否定的な批判だけではなく、事柄を整理して批評することや評論することといった意味も保持している（シップリー英語語源辞典、独和大辞典第二版）。

たとえば、哲学者カント（一七二四—一八〇四）の主著のタイトルである『純粹理性批判 (*Kritik der reinen Vernunft*)』は、理性能力のある種の限界をよく吟味して画定する、といった意味であって、「批判」ということで単純な攻撃や非難といったものを指しているわけではない。

また、日本語の「批判」も元々は、批評して判断することや、物事を判定・評価すること、良し悪しや可否について論ずることなどを意味していた（日本国語大辞典第二版）。

しかし、いつの頃からか、「批判」がこの国で常に否定的なニュアンスを帯びるようになったのも確かだ。この言葉をめぐる現在の状況は、その傾向がさらに強まり、極端になった結果だとも解釈できる。

日本の社会は同調圧力が強く、空気を読むことが推奨される風潮が強い、とはよく指摘されるところだが、確かに、批判的検討が必要な場面でも、相互的な「甘え」や「お約束」がその場のコミュニケーションを覆ってしまうケースがあまりに多い。和を少しでも乱す言葉——批判（批評、吟味）的な要素のある言葉——に皆が敏感になり、その場のノリに合わない言葉を発しづらくなるケースだ。（哲学対話や哲学カフェは、そのような状況を避けて、まずもって皆が自分自身の考えを自由に発言できる場をつくる営みだと言える。言葉に対する批判は、その種の場合であってはじめて有効なものだ。）

まして、そうした同調の空気が支配するケースでは、相手の主張に対して明確に否定的な意見や疑問を向けることは強く憚られるようになる。言うなれば、互いにうなずき合う同調的な言葉の空間と、その空間全体に向けられる容赦のない厳しい言葉、その中間領域が存在しなくなるのだ。この種の状況がコミュニケーションの多くを占めてしまえば、「批判」の言葉はますます刺々しく、敵意をもったものとしてのみ機能するようになる。「批判」が相手への攻撃として捉えられがちな現状には、以上のような背景があるのではないだろうか。

同調と攻撃の間の中間領域が確保されにくく、「批判」という言葉が本来含んでいた「内容の吟味」、「物事に対する批評や判断」、「良し悪しや可否をめぐる議論と評価」といったものがおろそかになりがちな現状は、「炎上」という言葉の現在の用法にも通じているように思われる。

「炎上」はいま、各種のメディアで発信された誰か（特に有名人や公人）の言動に対して、ネット上で非難や誹謗中傷が殺到することを指す言葉ともなっている。問題は、当該の言動が筋の通ったものや正当なものであろうとも、逆に、筋の通らないものや不当なものであろうとも、どれも等し並みに「炎上」と呼ばれる、ということだ。ある差別を告発する勇気ある発言をターゲットに、差別主義者たちが罵詈雑言を集中させることも「炎上」と呼ばれるし、とても看過できないひどい酷い差別発言に対して、その問題を指摘する真つ当な声が多く寄せられることも、同様に「炎上」と呼ばれる。そして、何であれ炎上してフォロワーが増えて良かった、チャネルの登録者数やオンラインサロンの会員が増えて良かった、ということも平然と言われたりする。そこでは、火の手の大きさや、それに伴う熱量の多さが、物事の真偽や正否や善悪に取って代わってしまったている。

マスメディアで頻繁に用いられている「賛否の声が上がっている」という類いの常套句も、問題になっている事柄の内容をさしあたり度外視

して、熱量の上昇のみに言及できる便利な言葉だ。どちらかの道理に明らかに分がある場合にも、また、賛否どちらかの声の方が圧倒的に優勢である場合にも、「賛否の声が……」と表現しておけば、旗色を鮮明にせずに済むし、自分の言葉に責任をもつ必要もなくなる、というわけだ。「炎上している」とか「賛否の声が上がっている」といった言葉によって物事をひとまとめにしてしまうのではなく、具体的な内容を「批判」する行為が、メディアでもそれ以外の場でも、もっと広範になされる必要がある。そして繰り返すならば、それは必ずしも否定的な行為だとは限らない。賛意を示すのであれ、あるいは難点を指摘するのであれ、人々がともに問題を整理し、吟味し、理解を深め合っている場こそ、本来の意味で「批判」が行われている、建設的な議論の場なのである。

とはいえ、非難や攻撃とは違って、批判は決して簡単な行為ではなく、私自身も日々試行錯誤しているというのが実情だ。どうすれば的を射た批判を展開できるのかという以前に、相手との人間関係がネックになることも多い。というのも、批判をすれば、多少なりとも相手の気分を害したり傷つけたりすることは避けられないからである。だとすれば、批判は具体的にどう行うべきだろうか。^⑤

批判する際には言い方に気をつける、というのはシンプルだが、しかし、まずもって重要なポイントだろう。たとえ有益な内容の指摘であっても、不必要にきつい言葉や口調で語られては、感情的にとっても受け入れられなくなる。

また、内容という面ですでに批判の典型は、相手の言葉尻だけを捕らえて自分の土俵（自分の専門分野、自分の経験など）に引きずり込み、その土俵上で相手を説き伏せる、というものだ。たとえば、「あなたはいま「無意識に……」と仰つたが、認知科学的には「無意識」とはこれこれこういうものであるから、「無意識」の問題として捉えるのは不適当だ」という風にして切り捨てただけでは、相手がひどく気分を害するのも当然だ。そして何より、こうしたやりとりでは、問題に対して互いに理解を深め合うことも、別の見方を知ったり新しい見方を生み出したることも難しい。

逆に言えば、重要なのは相手の表現を尊重するということだ。具体的には、相手の言葉を十分なかたちで拾い上げ、それがどのような脈絡の下で発せられたのかをきちんと踏まえたうえで応答する、ということが必要だろう。批判を受ける側も、自分の言わんとすることをちゃんと聞いてもらい、それをよく理解してもらったうえで、納得できる問題点を指摘されるのであれば、苦い思いをしたり、多少傷つく部分はあるとしても、感謝する部分の方が多いだろう。（これは実際、私が学術的な論文を書いたり発表を行った際に、さまざまな批判を受ける経験を重ねる中で実感していることでもある。）

また、批判を行う側にとっても、相手の言葉によく耳を傾け、それをよく理解しようと努めることは、自分には見えていないものの見方や馴染みのない考え方に触れ、学ぶ機会になる。そしてそれは、問題に対する理解を深め、解決の道を探る大事な手掛かりになりうるのである。

批判は、相手を言い負かす攻撃の類いではない。繰り返すなら、批判は相手と、ともに問題を整理し、吟味し、理解を深め合うために行われるべきものだ。それゆえ、批判は、相手に真つ向から向き合うというよりも、言うなれば、お互いに少し斜めを向き、同じものを見つめ、そのものの様子や意味について語り合う、というイメージで捉える方が適當だろう。

そして、そのような場が成り立つための大前提として、私たちは自分の言葉に責任をもたなければならない。私たちが臆面もなく、「さっきの言葉はそういう意味で言ったんじゃない」といった言い抜けを繰り返したり、口に出した言葉を取り消そうとしたりするのであれば、（相手が発した言葉を真面目に受けとめ、よく理解しようと努める）という営み自体が不可能になってしまうからだ。

（古田徹也『いつもの言葉を哲学する』より）

※設問の都合上、原典を一部改変した。

問一 傍線①「物議を醸す事態」の説明として最も適當なものを選び、記号で示せ。

ア 「批判」を辞書的な「善し悪しについて論ずる」という意味ではなく、「攻撃や非難」といった意味で用いたため、世間の議論を引き起こしたということ。

イ 「批判」についての説明がなかったことから、「善し悪しについて論ずる」という意味でもとれることとなり、そのために、世間の議論を引き起こしたということ。

ウ 「批判」という言葉の意味を吟味せずにスローガンで使ったため、有権者から政治家としての常識がないと思われ、誹謗中傷を受ける事態となったということ。

エ 「批判」の解釈を有権者に任せることによって責任を回避しようとしたものの、「善し悪しについて論ずる」という意味で用いようとしたことが発覚し、誹謗中傷を受けたということ。

問二 傍線②「『批判』がこの国で常に否定的なニュアンスを帯びるようになった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア カントの『純粹理性批判』を間違って解釈する人が増えたため、一般的な「批判」の意味も変わってしまったから。

イ 日本の社会は同調圧力が強く、その場を乱して意見を述べる行為は、絶対的な悪と見なされるから。

ウ 同調圧力が強い日本の社会では、同調と攻撃の中間領域が形成されず、可否について論ずる言葉は敵意をもってしまうから。

エ ネット社会では炎上が度々起こり、その空間は、相手を攻撃する言葉で埋め尽くされるようになるから。

問三 傍線③「相互的な『甘え』や『お約束』がその場のコミュニケーションを覆ってしまうケース」として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア 班で行った実験の結果を効率よく考察するために役割を分担し、自分の担当以外は意見を出さなかった。

イ 授業中に行ったグループ協議で反対意見を考えたが、授業後の人間関係を気にして発言しなかった。

ウ 体育祭の種目をホームルームで決めるときに、体育委員が中心になって行うものと考え、不用意に発言しなかった。

エ 生徒会で校則の改善案を考えていたときに、会議の方向性を考え、従来通りがいいとは言わなかった。

問四 傍線④「本来の意味で『批判』が行われている、建設的な議論の場なのである」とあるが、この場についての説明として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア 話し手と聞き手がともに言葉を探し、言葉を待つことができる場。

イ 攻撃ないし非難の色合いをぼやかそうとする場。

ウ 自分自身の考えを自由に発言できる場。

エ 同じものを見つめ、そのものの様子や意味について語り合う場。

問五 傍線⑤「だとすれば、批判は具体的にどう行うべきだろうか」とあるが、その具体的な方法として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア 相手に指摘を受け入れてもらえるように、言い方に気をつける。

イ 新しい見方を生み出すために、自分の専門的知識を駆使して説明する。

ウ 相手の表現を理解しようと努め、尊重したうえで問題点を指摘する。

エ 自分の思考の枠にはない相手の考え方について学び、解決策を考える。

問六 本文で述べられている「批判」について、最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 日本では互いを認めあう同調的な空間が支配的であるため、批判は相手への攻撃として捉えられがちになっている。

イ 問題の本質を捉えたり整理したりすることは人間関係を考慮する以上に難しいため、批判は簡単な行為とはいえない。

ウ 批判相手の意見を聞くことは自分の意見の再確認につながるため、さらなる批判を行うことができる。

エ 批判は相手を言い負かすものではないため、お互いに少し斜めを向き、同じものを見つめるイメージが適当である。

三

次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

みなさんは人工妊娠中絶について、どのような考えを持っていますか。胎児の命を奪う行為であり、よくないと考えますか。それとも産み育てることができないのなら、やむを得ないと容認しますか。日本でも時に議論となるテーマですが、キリスト教徒が多く、中絶に反対する人がかなりの数にのぼる米国では、国論を二分して選挙の争点になるほどの大問題です。

徳島大学の山口裕之准教授は、この問題に関するレポートを学生たちに求めました。すると、提出されたレポートは「中絶は人それぞれで決めたらいいい」という結論がほとんどでした。「自分は中絶について何となくよくないと思うけど、決めるのは人それぞれだから」。ことの是非を正面から論じるレポートはごくわずかで、多くは「自分は嫌だ」という根拠のない感情だけが書かれていました。

「そんなことは誰にも決められない。考え方は人それぞれです」。口に出してみると、何か分別がありそうで、響きのよい言葉に感じられます。でも、本当にそれでいいのでしょうか。山口さんは「自分で調べたり、考えたりするコストを省くと「人それぞれ」に行き着く。一見相手を尊重しているように見えて、実際には他者への理解や他者との対話を放棄する行為だ」と厳しく指摘し、学生たちに物分かりのよさに逃げ込まないよう訴えます。

講義では「レポートを書く意義は、根拠を持って自分の意見を主張するスキルを身につけるため」と強調しています。ところが、学生たちの文章を読むと、文末はたいてい「思う」「考える」「感じる」。「人それぞれ」から脱却しようとする、今度は自分の思いつきばかりが並んでしまふのです。「私の思ったことは確かに真理だし、理由を明示する必要がないから楽だ。でも、苦しくても「思う」を排除しなさい。文章の末尾に「思う」と書いてしまったら何度でも消して、自らに根拠を問いなさい」。苦悩する学生たちを、そう励まし続ける山口さんですが、気がかりなことは他にもあります。

学生たちが提出したレポートについて「中身が不十分だ」と感想を述べると、「こんなに頑張って調べてきたのに、どうして評価してくれないんですか」と反発する学生がいるのです。努力すれば中身は問われず、内容のよしあしよりも、調べてきた行為自体を評価してもらえろと思ひ込んでいるようだというのです。

背後に透けて見えるのは、小中学校の調べ学習の影響です。調べる行為自体に価値を置き、書籍やインターネットからコピペした製作物を提出すればよしとされてきた結果、大学生のレポートの中身も空疎になっているのではないかと推測されるというのです。

山口さんは著書『コピペと呼ばれない文章の書き方教室』で、考えることの重要性について次のように記しています。「言論の自由」とは（中略）「すべての意見に等しい価値がある」という意味ではありません。幅広い知識によって根拠づけられた意見のみに価値があるのです」。「考

える」とは、賛否両方の立場の主張について、その客観的な根拠を比較し、客観的に「正しい」といえる結論を出すということです」。

学校では「多様な意見を尊重しよう」とよく言われます。人の考え方はそれぞれ尊重されるべきですが、すべてが同じ価値を持っているのではないという点は見落としがちです。「正しさ」の追究には、それ相応の手間と時間がかかるのです。

二〇一六年夏の参議院議員選挙から十八歳にも選挙権が与えられました。十八歳の投票率は約五十一％で、二十代、三十代を上回りました。投票権を持つ十八歳が全体の約四分の一（七月生まれまで）だったことを考えると、現役高校生の投票率は八十％超にのぼったとも言われています。

現役高校生の投票率がこれだけ高かった理由の一つとして、学校が政治教育の一環として模擬選挙を実施した点が挙げられます。選挙の前は「十八歳にはまだ投票する分別がないのではないか」と懐疑的な大人もいましたが、蓋を開けてみれば、十八歳も大人と似たような投票行動をしていることが分かりました。主権者教育を推進しているNPO「模擬選挙推進ネットワーク」によると、実際の選挙結果と中・高・大の若者が投票した模擬選挙の結果を比較してみると、政党別の得票率に大きな違いがないことが明らかにになりました。

ところが、ある公立中学校で実施された模擬選挙では、他の多くの学校とは逆の結果が現れました。他校と異なるのは、模擬選挙の際に政党名を架空の名前にして、実際の政党との関係が分からないようにした点にありました。政党名をすべて伏せ、マニフェスト（政策提言）は実在する政党が掲げているものを使用しました。

模擬選挙前には、新聞や選挙公報などを参考にして「暮らし・経済」「安全保障」「エネルギー」「子育て」「憲法」などの項目ごとに各党の主張を書き込み、グループで意見を交換しました。「マニフェストにある法律が認められると、誰にとって有利で誰が不利になるのかを考えることができた」「ある政策をめぐって自分とはまったく異なる意見を言っている人がいたが、その人の意見にも賛成できる自分に驚いた」など、生徒からは主権者教育の成果を感じさせるような意見が出されました。

その後に模擬投票を実施したところ、野党に票を投じる生徒がかなりの数にのぼったそうなのです。生徒たちはなぜ、他校の模擬選挙とは異なる投票行動をしたのでしょうか。

担当教諭の分析は、次のようなものでした。「多くの学校の模擬投票で与党が強かったのは、名前によるバイアスがかかったからではないか。周りの生徒が「あの政党がいい」と言うのを聞き、みんなが投票しそうだからという政党が、「正解」になってしまった可能性がある。あくまで推測ではないが、自分でどのような政策がよいのか判断せず、他人の動向に過敏になったため、強い党や大きい党を利する結果になったと考えられる」。教諭は「実際の政党名を使って模擬投票をすれば、うちの学校も他校と同様の結果になったと思う」とも付け加えました。

この一校の結果だけをもって「名前によるバイアスの影響」と認めるのは無理がありますが、同じような話は初めて投票した十八歳の若者からも耳にしました。ある女子大学生は、投票に臨んで新聞を読んだり、政見放送を見たりして、どの政党や候補者に一票を投じるべきか真剣に悩んだといいます。しかし、周囲の友人には「自分で考えてもよく分からないので、みんなが支持している政党や大きな政党に投票した」と話す人が少なくなかったそうです。

膨大な政策提言の中から何を重視し、政策の実現可能性を見極めて投票先を決めるのは大人でも難しく、周囲に合わせてしまう心理はよく分かります。真剣に投票先を考えている有権者であっても、絶対の自信を持って投票しているわけではなく、「よりましな方」を選んでいくというのが実態でしょう。

あふれる情報の前で身動きが取れなくなり、最後は周囲の評判に頼ってしまうのは、日々の生活でもよくあることです。例えば電化製品を購入する際には、みなさんもインターネットやカタログなどで製品にまつわる情報を集めるのではないでしょうか。ところが、調べるうちに似たような性能のものがたくさん見つかり、種類が多すぎてどれがよいのか分からなくなってしまうこともあります。最後は「一番売れている物がよい物に違いないだろう」と、考えるのをやめてしまった経験が、私にもあります。

さきほどの教諭の指摘は、同様のことが選挙でも起きているのではないか、という見方を示したものです。ただ、投票に行かなかった十八歳の発言からは、もっと深刻な問題が浮かび上がります。「自分は何も政治のことは知らないから、投票するのはおがましい」「私のような理解の浅い者が投票してよいのか」「間違った投票をするかもしれないから棄権した」――。あらためて申し上げるまでもありませんが、投票には正解などないのです。選挙権のあるみなさんが、おがましさを感じる理由はどこにもありません。

正解のない問いを考えるには、根気とともに飽くなき探求心が要求されます。日本の学校のテストや大学入試では、問われるのは正解のある問題がほとんどですが、フランスの統一国家試験「バカロレア」^④では、どこにも正解のない問いが出題されます。主に大学への進学を希望する十八歳の高校生が受験する大学入学資格試験で、合格すれば原則として希望する大学に入学できる制度です。かのナポレオンが創設し、二百年もの歴史を持つ試験で、幅広い教養や表現力が必要とされることで知られています。

日本の大学入試センター試験の二〇一五年の受験者は約五十六万人でしたが、バカロレアは同じ年にそれを上回る約六十八万人のフランス人が受験しました。思考力や論理的に表現する力を適切に測る目的で、解答はほぼ全科目で記述式となっています。^⑤

試験には歴史や文学など多くの科目がありますが、とりわけ哲学は難関と言われています。二〇一五年には「人は自らの過去が形作ったものなのか」というわずか一文の問題が出題されました。受験生は四時間かけてこの問いに答えます。バカロレアは国民的行事であり、哲学の出題

は国民の関心事でもあります。担当の国民教育大臣の記者会見では、記者から「今回の哲学の問題にはどのような感想を持たれましたか」と所感を求める質問が出るそうです。

哲学の試験にどのように解答したのか、高校を卒業したばかりの女性に、パリのカフェで話を聞かせてもらいました。彼女はまず「過去に犬にかまれた経験があれば、大人になっても犬は怖いと思うことがある。過去に起きた出来事の結果、今の自分が形作られている点は認めなければならぬ」と現在と過去とのつながりのある事例を挙げた上で、「今の自分は過去にもつながっているし、未来の自分から見れば今にもつながっている。自分は過去からの一方通行で存在しているわけではない」と、時間軸をテーマに持論を展開しました。

答案用紙への記述は表裏十二ページにも及び、設問に対してイエスでもノーでもない解答に仕上げていったそうです。「選択式のテストの方が楽ではないですか」と尋ねたところ、「バカロレアを受ける前だったら「もちろん」と答えるけれど今は違う。自分の考えのプロセスを分かりやすく、美しい文章で表現する力は、バカロレアがなければ身につけることができなかったと思うから」と話してくれました。彼女は優秀な成績で合格し、ソルボンヌ大学の歴史学科に進みました。

フランスの高校で哲学を教えている先生によると、バカロレアの哲学の問題では、著名な哲学者の意見を引用するだけの答えは、評価の対象にはなりません。正確に引用されていても、なぜその考え方を提示するのか、自分なりの根拠を示し、自らの意見を述べなければ合格点には達しません。記憶力に頼って高得点を得ることはできないのです。

日本の文部科学省に当たるフランスの国民教育省を訪れ、試験運営部長に哲学の出題の意図を尋ねました。「知識があるだけなら、ロボットでもコンピューターでも人間の代わりはいくらでもできる。バカロレアでは、社会で主体的に生きていく大人になるために、知識の量ではなく、知識をどう活用できるかをみている。知識の量が少なくても、結論までの道筋をきちんと示すことができれば、合格点を得ることができる」。説明を聞くと、バカロレアが知識の活用に着目していることがよく分かります。

フランスでは哲学は「精神の体操」とも呼ばれているそうで、人生のさまざまな問題にどのように対処すべきかの道筋を照らししてくれるものだと考えられています。試験運営部長は「すぐに役に立つ実用的なものは、すぐに廃れるとも言える。これから先、科目の再編はあるかもしれないが、哲学だけは外さない。哲学がなくなったら、バカロレアではなくなってしまうから」と強調していました。同席した高校の女性教諭が、すべての科目の中で哲学が特別な存在である理由を簡潔に述べてくれました。「哲学以外の教科は、覚えたかどうか、理解したかどうかを試される。哲学はまったく逆。自分で考えられるように、自由な人間になるために学ぶ。レシピはどこにもありません」。

バカロレアは一部の試験科目でマーク式があるものの、ほかはすべて記述式を採用しています。日本の大学入試センター試験とは真逆です。

二〇一五年のバカロレアに、採点や試験監督として関わった高校教員は全国で約十七万人にのぼり、採点には約三週間が費やされました。日本のセンター試験のように受験料収入はないため、国が約七十八億円という巨額の予算を投じています。

こうした試験の際に最も配慮を要するのは公平性ですが、その観点から見ると記述式の採点には確かに困難が伴います。解答が長文になるほど採点者の主観に左右される余地が大きくなるからです。このため、バカロレアでは論証の質やフランス語の能力、文体などの採点項目を細かく設け、採点していきます。偏った評価がないか調べるため、一度採点した答案は地区ごとにつくられた調整委員会が再度チェックし、公平性を担保するように工夫しています。

フランスの高校教員は「生徒の考える力を測定するために労力は惜しまないが、人間が採点する以上、どうしてもぶれが生じる可能性はある」と率直に難点を認めています。他方で、公平で誤りがないとされるマークシート式に対しても「解答がまったく分かっていなくても、ヤマ勘で正答になることがある。選択式だから公平と考えるのはおかしいのではないか」との見方を示します。

バカロレアにも課題はあります。合格すれば基本的にどの大学にも入れる資格試験なのですが、最近合格率が八十%を超えるようになりました。希望者は都市部の大学に集中する傾向があり、合格したのに望んだ大学に行けないという問題が生じているのです。

それでも、フランス人の多くはバカロレアを続けるべきだと支持しています。高校で文学を教えている教師は「自分の言葉で答案を書くことは、受験生にとって自己表現のチャンスでもある。自らの知識に価値を与える主導権を受験生に与えている点に、バカロレアの可能性を感じる」と指摘しています。

（名古屋隆彦『質問する、問い返す』より）

※設問の都合上、原典を一部改変した。

問一 傍線①「この問題に関するレポートを学生たちに求めました」とあるが、学生たちのレポートに関して最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 様々な文化的背景があることを考えた上で、個人の選択を尊重すべきだとするレポートが多かった。

イ 自分の感情をストレートに出すことができおり、わかりやすい文章で書かれたものが多かった。

ウ 自分が思いついたことを羅列しており、なぜそう思ったかという根拠は書かれていないのがほとんどだった。

エ 学生は自分で調べるのが面倒だったため、全て個人の裁量に任せるべきという結論にしていた。

問二

傍線②「人の考え方はそれぞれ尊重されるべきですが、すべてが同じ価値を持っているのではないという点は見落としがちです」とあるが、見落としの結果、大学生はどうなると推測できるか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 根拠を持って自分の意見を主張するための能力が伸長しなくなる。

イ 課題の内容ではなく、努力をしたことについて評価されると思うようになる。

ウ 調べる行為を価値の高いものと考え、資料のコピペでもいいと考えるようになる。

エ ある意見に対し賛否両方の主張を比較して、正しさを追究することができなくなる。

問三

傍線③「十八歳も大人と似たような投票行動をしていることが分かりました」とあるが、似たような投票行動になった理由として、どのようなことが推測できるか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 授業の中で政党別の得票率を学び、生徒全員がそれに近づけさせようと思ったということ。

イ 大人と全く同じ情報を十八歳も得ているため、必然的に同じ投票行動になるということ。

ウ 主権者教育を行った結果、投票先を吟味して、自信を持って投票することができたということ。

エ 政策を調べるうちに情報過多で疲れてしまい、有名なところに投票することにしたということ。

問四

傍線④「フランスの統一国家試験『バカロレア』では、どこにも正解のない問いが出題されます」とあるが、バカロレアの哲学で評価される点として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア どのように知識を活用し、自分なりの根拠から主張を導いているかという点。

イ 豊富な知識量から、オリジナリティあふれるアイデアを出しているかという点。

ウ 著名人の思想を理解し、適切などころで哲学者の言葉を引用しているかという点。

エ 内容だけでなく、文字と文章の美しさによっても、読者に感動を与えられるかという点。

問五 傍線⑤「解答はほぼ全科目で記述式となっています」とあるが、記述式についての説明として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア 採点に時間がかかり、終わるまで三週間かかることもある。

イ 採点にぶれが生じることから、記述式に反対する国民は多い。

ウ 試験監督を含め携わる人数が多く、人件費は巨額になっている。

エ 公平性が担保できるように、採点項目を細かく分けている。

問六 この文章を読んだ生徒どうしが話し合っている。文章の理解に誤りがあるものを選び、記号で示せ。

ア 生徒A…私は調べ学習で、調べたことをそのまま書き写すことが多かったから、衝撃を受けたわ。振り返ってみると、調べたことに根拠がなくて、感想のように終わらせていたかもしれない。

イ 生徒B…そうなんだ。僕は、十八歳になったから選挙の話題が気になったよ。政党や候補者の情報は多いけど、すべての情報が同じ価値ではないというのが、投票先を考えるためには重要かもしれないなあ。

ウ 生徒C…投票に正解がないからこそ、投票先を決めるのは難しいわね。政治がわからなくても投票してもいいとはいえ、最低限の知識はほしいものよね。

エ 生徒D…知識は大事だと思うよ。その点、バカロレアはすごいね。記述試験だから知識がないと書けないし、手に入れた知識をそのまま引用すれば、自己表現になるんだから。フランスに行きたいなあ。

